

保育者のストレスと専門性との関連

— 幼稚園教諭と保育士との比較より —

渡邊 賢二 (皇學館大学教育学部)

青山 奈央 (三重県立子ども心身発達医療センター)

〈要旨〉本研究は、保育者ストレス、心理的ストレス反応、保育者の専門性について、幼稚園教諭と保育士で比較検討した。また幼稚園教諭と保育士の保育者の専門性、保育者ストレス、心理的ストレス反応のモデルを検討した。その結果、幼稚園教諭と保育士で比較した結果、子ども対応・理解のストレスと保護者対応のストレスについて、幼稚園教諭より保育士の方が有意に高い得点を示した。保育者の専門性の自己考慮、自己注意、子ども分析、子ども察知について、保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。幼稚園教諭と保育士の専門性、ストレス、心理的ストレスのモデルを検討した結果、幼稚園教諭では、子ども察知から子ども対応・理解ストレスへ、子ども対応・理解ストレスと職場人間関係ストレスから心理的ストレス反応に影響を及ぼしていた。保育士では、自己考慮から子ども対応・理解ストレスへ、子ども分析から子ども対応・理解ストレスと時間欠如によるストレスへ影響を及ぼしていた。子ども対応・理解ストレス、職場人間関係ストレス、保護者対応ストレスから心理的ストレス反応へ影響を及ぼしていた。

〈キーワード〉保育者ストレス、保育者の専門性、心理的ストレス反応、幼稚園教諭、保育士

【問題と目的】

以前より、国内の幼稚園教諭と保育士（以下保育者とする）の勤務環境が厳しく、勤務体制や賃金などの見直しが急務と言われてきている。また、虐待への対応や発達障がいをもつ子どもへの支援、モンスターペアレントと呼ばれる保護者への対応など、様々な問題が昨今叫ばれている。このような教育や保育の現場では、保育者のメンタルヘルスが問題視されている。保育者の身体的疲労感や慢性疲労症候は高く（那須野，2006）、保育者の84.9%が、職場において何らかのストレスを感じていると指摘されている（富田，2009）。

保育者のストレスは、日常的に関わる子どもやその保護者にほぼ固定されているため、ストレスイベントは慢性的に維持されている（赤田，2010）。これらを考慮すると、保育者のストレスイベントは、暴露時間が限定された独立したイベント（Turner & Wheaton, 1995）ではなく、日常いらいち事（Daily Hassles; Lazarus, 1984）であると言える。これらより、保育者のストレスを測定するためには、保育者の日常いらいち事を測定する必要がある。坂田（2000）はこれまでの保育者のストレスを測定する尺度について、一般的な身体的あるいは精神的健康状態の検討のみに留まっており、保育職という専門性を加味した包括的な尺度を用いていないと指摘している。また、秦野・青木（2006）は西坂（2002）が作成した幼稚園教諭用ストレス尺度を参考にして、保育士に適用して研究を展開している。赤田（2010）は様々な保育者のストレスに関連する先行研究から、職務上の日常いらいち事を収集し、予防と治療に焦点をあてた「子ども対応・理解のストレス」、「職場人間関係のストレス」、「保護者対応のストレス」、「時間の欠如によるストレス」、「給料待遇のストレス」、「保育所方針とのズレによるストレス」の6因子から構成される保育者のストレス評定尺度を作成し、信頼性と妥当性も検証している。しかし、赤田（2010）は保育士のみを調査対象者として、ストレス尺度を作成しており、幼稚園教諭と保育士の両方を対象としていない。池田・大川（2012）は保育者とはいえ、幼稚園教諭と保育士は職場環境や職務条件も異なるため、共通点と差異点を検討する必要性を述べている。これらより、第一に、赤田（2010）が作

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

成した保育士ストレス評定尺度を参考にして、幼稚園教諭と保育士のストレスを測定する尺度を作成する。

保育者のストレスの背景要因について、数多く研究が行われている。西坂（2002）は幼稚園教諭を対象に、仕事の多さや時間の欠如がストレスやバーンアウトに影響を及ぼすと報告している。嶋崎・森（1995）は業務量の多さや多忙さがストレスやバーンアウトに影響を及ぼすと指摘している。また保育者間の人間関係が保育者にとって大きなストレスや負担になっているという指摘もみられる（赤田・滋野井・小正・友久，2009；石川・井上，2010など）。他に、保育者のストレスを緩和させる要因として、保育者効力感との関連についての研究も行われている。西坂（2002）は保育者効力感が子ども理解・対応の難しさや学級経営の難しさを減少させると述べている。赤田（2010）は保育者効力感が子ども対応・理解のストレスや職場人間関係のストレスを減少させると報告している。また嶋崎・森（1995）も保育者効力感の類似概念である「保育技術に対する自信」が精神的健康を維持する要因となりうると報告している。西坂（2002）は保育者効力感とは、保育者個人が子どもの学習により良い影響をもたらすことができるという信念であると述べている。

これまでに国内で、保育者のストレスの対処法として、問題中心コーピング、援助希求コーピングのレパートリー、スキルを獲得する心理教育、自己主張の仕方のスキルやソーシャルスキルトレーニングなどが重要であると指摘されてきている（加藤・安藤，2015）。これらは、保育者の専門性の獲得がストレスの対処法として、必要不可欠であることを示唆している。これらより、保育者のストレスを緩和する保育者効力感も重要であるが、保育者の専門性もストレスを緩和することが推察され、その関連について検討することも必要と考えられる。

次に、保育者に対するストレスが精神的な問題に影響を及ぼすことについて、西坂（2002）は幼稚園教諭に対して調査を行い、園内の人間関係の問題、仕事の多さと時間の欠如が精神的健康に影響を及ぼしていると述べている。また西坂・岩立（2004）は幼稚園教諭に対して調査を行い、教職経験年数1年から3年の教諭は園内の人間関係の問題が精神的健康に、4年から9年の教諭は

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

園内の人間関係と子ども理解・対応の難しさが精神的健康に、10年以上の教諭は園内の人間関係と学級経営の難しさが精神的健康に影響を及ぼしていると報告している。一方、池田・大川（2012）は、幼稚園教諭と保育士の職務環境のストレスがバーンアウトに影響を及ぼしており、幼稚園教諭と保育士のストレスには相違があることを述べている。本研究においても、幼稚園教諭と保育士のどのようなストレスがどのような精神的な問題に影響を及ぼしているのか検討する必要があるだろう。

これらより、保育者ストレスと心理的ストレス反応、保育者の専門性との関連について検討する。保育者の専門性が保育者ストレスの緩和を予測し、保育者ストレスが心理的ストレス反応を予測することが考えられる。

先述してきたように、保育者には、幼稚園教諭と保育士の職種がある。幼稚園は指導や保育を実施する教育施設であり、保育所は児童福祉施設である。保育所は、「保育に欠ける子ども」という入所要件があり、年齢は0歳児からである。保育士は保育ができない保護者に子どもの様子を伝えることや、会話のできない乳児などの気持ちを汲み取ること、統合保育による障がい児対応など多様であり、幼稚園教諭とは異なるストレスを抱えていると言われている（赤田，2010）。また、池田・大川（2012）は職務ストレスが職務に対する精神状態に及ぼす影響を検討した結果、幼稚園教諭と保育士には相違があると述べている。これらより、幼稚園教諭と保育士は、教育施設と児童福祉施設の相違、仕事の内容や専門性、担当する子どもの年齢も相違があると考えられるため、幼稚園教諭と保育士の保育者ストレスと心理的ストレス反応、保育者の専門性は相違があると推察される。

以上の問題意識より、第一に、赤田（2010）が作成した保育士ストレス評定尺度を用いて、幼稚園教諭と保育士が評定する保育者ストレス尺度を検討する。第二に、保育者ストレス、心理的ストレス反応、保育者の専門性について、幼稚園教諭と保育士で比較検討する。第三に、保育者ストレスと心理的ストレス反応、保育者の専門性の関連を検討する。また、幼稚園教諭と保育士の保育者の専門性、保育者ストレス、心理的ストレス反応のモデルを検討する（Figure 1）。

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）



Figure1 保育者の専門性，保育者ストレス，心理的ストレス反応のモデル

【方法】

1. 調査対象者：211名（幼稚園教諭50名，保育士161名）。公立幼稚園13園と保育所10所に勤務する幼稚園教諭，保育士
2. 調査時期：2016年10月
3. 手続き：教育委員会に依頼し，各園と各所に質問紙を配布した。保育者は勤務先で回答し，その後回収した。
4. 調査内容：
 - （1）基本的属性：園名または所名を尋ねた。
 - （2）保育者ストレス尺度：保育者のストレスを測定するために，赤田（2010）が作成した保育士ストレス評定尺度を用いた。「1：全く感じていない」～「5：大変感じている」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。この尺度は「子ども対応・理解のストレス」10項目，「職場人間関係のストレス」6項目，「保護者対応のストレス」5項目，「時間の欠如によるストレス」4項目，「給料待遇のストレス」2項目，「保育所方針とのズレによるストレス」2項目から構成されている。幼稚園教諭1名，保育士1名，教育委員会に勤務する教師3名と項目について相談した結果，給料待遇のストレス2項目，保育所方針とのズレによるストレス2項目，クラス全体の雰囲気に関する1項目は，公立に勤務する保育者，またクラス担任をしていない保育者にとっては適切ではないと判断したため24項目を採用した。得点が高いほど，ストレスが高いことを示す。
 - （3）心理的ストレス反応尺度（鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野，1997）：不安・抑うつ6項目，不機嫌・怒り6項目，無気力6項目から構成されている。「0：全くちがう」～「3：その通りだ」の4段階評価（0点～3点）で回答を求めた。得点が高いほど，心理的ストレス反応が高いことを示す。
 - （4）保育者の専門性尺度：保育者の専門性を測定するために，杉村・朴・若

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

林（2009）が作成した保育における省察尺度22項目を用いた。「1：まれに」～「5：いつも」の5段階評価（1点～5点）で回答を求めた。保育者自身に関する省察である自己考慮6項目，自己注意5項目，子どもに関する省察である子ども分析7項目，子ども察知4項目，他者をとおした省察である他者情報利用6項目，他者情報収集5項目から構成されている。本研究では，自己考慮，自己注意，子ども分析，子ども察知の22項目を用いた。得点が高いほど，専門性が高いことを示す。

【結果】

1. 保育者ストレス尺度の因子分析

保育者ストレス尺度の24項目に対して，最尤法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化（7.56, 2.68, 2.25, 1.99, 1.11…）と赤田（2010）の研究結果を考慮して，4因子構造が妥当であると考えられた。そこで，4因子を仮定して，最尤法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。なお，回転前の4因子で24項目の全分散を説明する割合は60.29%であった。赤田（2010）が行った因子分析と各因子に含まれる項目が同様であったことから，因子名を同様に名づけた。第1因子は，「気になる子どもにうまく対応できない」「子どもに必要な援助が分からない」など9項目で構成されており，「子ども対応・理解のストレス」と命名した。第2因子は，「まわりの先生の態度と行動」「自分と他の先生との関係」など6項目で構成されており，「職場人間関係のストレス」と命名した。第3因子は，「保育者と保護者の価値観が違うこと」「保護者に保育者の思いが伝わらないこと」など5項目で構成されており，「保護者対応のストレス」と命名した。第4因子は，「休みが取りにくいこと」「自分のプライベートな時間の欠如」など4項目で構成されており，「時間の欠如によるストレス」と命名した。

次に，各因子の平均値（SD）と信頼性係数（ α 係数）を算出した。子ども対応・理解のストレスの平均値（SD）は2.75(.65)， $\alpha = .87$ ，職場人間関係のストレスは2.67(.80)， $\alpha = .88$ ，保護者対応のストレスは2.70(.71)， $\alpha = .86$ ，

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

時間の欠如によるストレスは3.38(.93), $\alpha = .80$ であった。

最後に、保育者ストレス尺度の確認的因子分析を行った。モデル適合度は、 $\chi^2=253.86$, $df=211$, $p<.05$, $GFI=.899$, $AGFI=.856$, $CFI=.979$, $RMSEA=.034$ であった。GFIとAGFIは.900を下回ったが、適合した結果が得られたとして、以後の分析を行っていくこととした。

Table1 保育者ストレス尺度の因子分析

項 目	I	II	III	IV	共通性
I 子ども対応・理解のストレス					
気になる子どもにうまく対応できない	.98	-.05	-.16	-.12	.77
子どもに必要な援助が分からない	.77	.04	.05	-.15	.62
自分の知識が不足していること	.71	-.17	-.04	.15	.47
一人ひとりの子どもとの関わりを十分にもてないこと	.66	-.03	-.02	.15	.47
子どもの気持ちがわからない	.61	-.02	.13	-.05	.43
子どもの特徴がつかめない	.52	.10	.08	.09	.41
子ども集団全体の把握	.52	.15	.06	-.01	.39
自分が子どもを叱るということ	.44	-.02	.25	-.08	.33
わがままと必要の境界線の判断	.38	.20	.22	.03	.43
II 職場人間関係のストレス					
まわりの先生の態度と行動	.05	.86	-.10	.03	.72
自分と他の先生との関係	.17	.83	-.20	.00	.69
他の先生同士の人間関係	.04	.77	-.04	.10	.65
先生同士が気持ちを一つにして向き合うことができない	-.18	.76	.08	-.06	.52
他の先生と意見が一致しないこと	-.17	.66	.26	-.10	.53
職場という組織の中での自分の位置	.02	.50	.06	.08	.31
III 保護者対応のストレス					
保育者と保護者の価値観が違うこと	.01	-.09	.84	.06	.69
保護者に保育者の思いが伝わらないこと	-.03	.12	.75	-.03	.63
保護者と子どもに対する理解が異なる	.11	-.06	.72	.04	.58
保護者が保育所または幼稚園に対して非協力的なこと	.02	-.05	.71	.00	.48
保護者の保育に対する関心(低すぎる・高すぎる)	.01	.04	.66	-.01	.46
IV 時間の欠如によるストレス					
休みが取りにくいこと	-.03	.01	-.07	.85	.69
自分のプライベートな時間の欠如	-.04	-.04	-.08	.74	.50
休憩時間がないこと	.05	.07	.12	.65	.53
事務的作業の多さ	.01	.01	.15	.58	.41
	I	II	III	IV	
I	-	.41	.48	.20	
II		-	.46	.27	
III			-	.25	
IV				-	

2. 心理的ストレス反応と保育者の専門性の平均値(SD)と信頼性係数(α 係数)

心理的ストレス反応下位尺度の不安・抑うつは平均値(SD)と信頼性係数は.53(.60), $\alpha = .87$, 不機嫌・怒りは.52(.59), $\alpha = .89$, 無気力は.64(.61), $\alpha = .84$, であった。保育者の専門性の下位尺度である自己考慮の平均値(SD)と信頼性係数は3.55(.74), $\alpha = .88$, 自己注意は3.70(.72), $\alpha = .84$, 子ども分析

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

は3.89(.62), $\alpha = .88$, 子ども察知は4.26(.57), $\alpha = .81$ であった。

3. 各尺度の幼稚園教諭と保育士の比較

保育者ストレス, 心理的ストレス反応, 保育者の専門性について, 幼稚園教諭と保育士の差異を検討するために, t 検定を行った (Table 2)。その結果, 保育者ストレスの子ども対応・理解のストレスと保護者対応のストレスについては, 幼稚園教諭より保育士の方が有意に高い得点を示した。保育者の専門性の自己考慮, 自己注意, 子ども分析, 子ども察知については, 保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。

Table 2 各尺度の幼稚園教諭と保育士の比較

	幼稚園教諭	保育士	t値	
保育者ストレス				
子ども対応・理解のストレス	2.59	2.80	2.06 *	幼<保
職場人間関係のストレス	2.53	2.71	1.43	
保護者対応のストレス	2.31	2.83	4.70 ***	幼<保
時間の欠如によるストレス	3.58	3.32	1.73	
心理的ストレス反応				
不安・抑うつ	.52	.54	.20	
不機嫌・怒り	.41	.55	1.42	
無気力	.59	.66	.73	
保育者の専門性				
自己考慮	3.75	3.49	2.12 *	幼>保
自己注意	3.96	3.62	2.96 **	幼>保
子ども分析	4.15	3.18	3.54 **	幼>保
子ども察知	4.43	4.21	2.44 *	幼>保

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

4. 保育者ストレス, 心理的ストレス反応, 保育者の専門性の関連

幼稚園教諭と保育士の保育者ストレス下位尺度の関連を検討するために, ピアソンの積率相関係数を求めた (Table 3)。その結果, 幼稚園教諭では, 子ども対応・理解のストレスと職場人間関係のストレス, 保護者対応のストレスの間で正の相関関係, 職場人間関係のストレスと保護者対応のストレスの間で正の相関関係が認められた。保育士では, 子ども対応・理解のストレスと職場人間関係のストレス, 保護者対応のストレスの間で正の相関関係, 職場人間関係のストレスと保護者対応のストレス, 時間の欠如によるストレス, 保護者対応のストレスと時間の欠如によるストレスの間で正の相関関係が認められた。

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

Table3 保育者ストレス下位尺度の関連（幼保別）

	子ども対応・ 理解のストレス	職場人間関 係のストレス	保護者対応 のストレス	時間の欠如に よるストレス
子ども対応・理解のストレス	-	.36 *	.59 ***	.09
職場人間関係のストレス	.40 ***	-	.33 *	.08
保護者対応のストレス	.46 ***	.43 ***	-	.17
時間の欠如によるストレス	.28 **	.37 ***	.37 ***	-

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05
上段:幼稚園教諭, 下段:保育士

幼稚園教諭と保育士の保育者ストレスと心理的ストレス反応、保育者の専門性の関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を求めた（Table 4）。その結果、幼稚園教諭では、子ども対応・理解のストレスと不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力の間で正の相関関係、子ども察知との間では負の相関関係が認められた。職場人間関係のストレスと不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力の間で正の相関関係が認められた。保育士では、子ども対応・理解のストレスと不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力の間で正の相関関係、子ども分析との間では負の相関関係が認められた。職場人間関係のストレスと不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力の間で正の相関関係、自己注意、子ども分析、子ども察知との間で負の相関関係が認められた。保護者対応のストレスと不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力の間で正の相関関係が認められた。時間の欠如によるストレスと保護者対応のストレスと不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力の間で正の相関関係が認められた。

Table4 保育者ストレスと心理的ストレス反応、保育者の専門性との関連（幼保別）

	不安・抑うつ	不機嫌・怒り	無気力	自己考慮	自己注意	子ども分析	子ども察知
子ども対応・理解のストレス	.42** .54***	.29* .44***	.46** .58***	.13 .13	.01 .01	-.19 -.22**	-.36** -.15
職場人間関係のストレス	.41** .43***	.35* .37***	.31* .39***	.01 -.12	-.18 -.20*	-.11 -.22**	-.19 -.21**
保護者対応のストレス	.16 .36***	.27 .49***	.20 .32***	.01 .03	.01 .03	.05 -.02	-.11 -.02
時間の欠如によるストレス	.11 .26**	.00 .27**	.17 .25**	.18 .02	.18 .02	.09 -.07	.01 .08

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05
左:幼稚園教諭, 右:保育士

幼稚園教諭と保育士の専門性が、保育者ストレスの緩和を予測し、保育者ストレスが心理的ストレスを予測するというモデルを検討するために、多母集団同時分析を実施した。有意なパスのみFigure 2と3に示した。また、共分散と誤差相関は省略した。モデル適合度は、GFI=.993, AGFI=.959, CFI=1.000, RMSEA=.000であった。適合度指標について、GFI, AGFI, CFIは1.00に近いほど、RMSEAは.00に近いほどデータとモデルの適合度が望ましいと言われており（豊田, 1998）、十分な値を示していると思われる。

保育者のストレスと専門性との関連 (渡邊・青山)

幼稚園教諭では、子ども察知から子ども対応・理解ストレスへの負の標準偏回帰係数が有意であった。子ども対応・理解ストレスから不安・抑うつと無気力への正の標準偏回帰係数、職場人間関係ストレスから不安・抑うつと不機嫌・怒りへの正の標準偏回帰係数が有意であった。保育士では、自己考慮から子ども対応・理解ストレスへの正の標準偏回帰係数が有意であった。子ども分析から子ども対応・理解ストレスと時間欠如によるストレスへの負の標準偏回帰係数が有意であった。子ども対応・理解ストレスから不安・抑うつと不機嫌・怒りと無気力への正の標準偏回帰係数が有意であった。職場人間関係ストレスから不安・抑うつ、保護者対応ストレスから不機嫌・怒りへの正の標準偏回帰係数が有意であった。

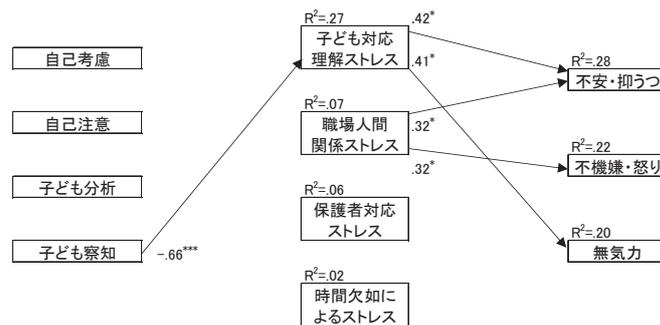


Figure2 保育者の専門性, 保育者ストレス, 心理的ストレス反応のモデル検討 (幼稚園教諭)
***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05

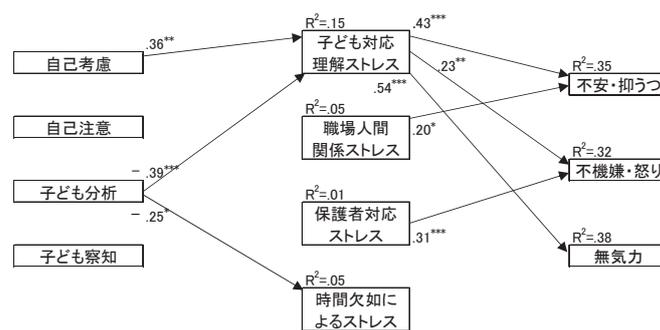


Figure3 保育者の専門性, 保育者ストレス, 心理的ストレス反応のモデル検討 (保育士)
***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05

【考察】

1. 保育者ストレスについて

保育者ストレス尺度を因子分析した結果、保育士だけを対象とした赤田の研究（2010）と同様、子ども対応・理解ストレス、職場人間関係ストレス、保護者対応ストレス、時間欠如によるストレスの4因子が見出された。赤田（2010）の報告によると、公営に勤務する保育士は、子ども対応・理解ストレスの平均値が2.86、職場人間関係ストレスは3.09、保護者対応のストレスは3.18、時間欠如によるストレスは3.25であった。本研究では、子ども対応・理解のストレスの平均値は2.75、職場人間関係のストレスは2.67、保護者対応のストレスは2.70、時間の欠如によるストレスは3.38であり、時間の欠如によるストレスの平均値だけは高いが、他の3因子については、赤田（2010）の研究結果より低い平均値を示した。赤田（2010）が実施した調査対象者より本研究の調査対象者の方がストレスを感じていない傾向にあると考えられる。しかし勤続年数や年齢により、ストレス度には差異があると報告されている（上村・七木田，2006）。本研究では勤続年数や年齢構成を考慮にいれなかった。今後は先述の変数も考慮に入れて研究をすすめる必要があるだろう。また、面接調査を用いて、ストレス場面やストレス度を検討することも必要であろう。

2. 幼稚園教諭と保育士のストレス、心理的ストレス反応、専門性の比較

幼稚園教諭と保育士のストレス、心理的ストレス反応、専門性を比較するために、t検定を実施した。その結果、保育者ストレスの子ども対応・理解のストレスと保護者対応のストレスにおいて、幼稚園教諭より保育士の方が有意に高い得点を示した。子ども対応・理解のストレスについては、幼稚園教諭より保育士の方が子どもと一緒にいる時間や保育時間が長いことや、子どもの年齢幅が大きく、0歳～2歳の子どもも保育していることから、保育士の方がストレスを感じるのではないかと考えられる。保護者対応のストレスについては、保育所に子どもをあずけている保護者は、フルタイムの仕事に就いている可能性が考えられる。そのため、仕事や子育てのストレスなどを抱えており、そのストレスを保育士に向けている保護者もいることも考えられる。また、子どもの

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

年齢幅があるため、幼稚園児の保護者より保護者の年齢幅が広いことや、子ども一人ではなく、きょうだいをあずけている保護者もいると思われる。保護者も多様な悩みや問題を抱えている可能性があり、それを保育士に話をすることが考えられ、保育士は保護者に対するストレスを抱えていると思われる。しかし本研究では、ストレスの詳細な内容を検討していないため、幼稚園教諭と保育士に面接を実施し、内容を検討する必要もあるだろう。

保育者の専門性では、自己考慮、自己注意、子ども分析、子ども察知のすべての下位尺度において、保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。保育士は子どもを保育する時間が長く、保育者自身のことや子どもの保育のことを考える時間が限られていると思われる。一方、幼稚園教諭は子どもを一定の時間で自宅に帰すことができ、一日の保育者自身の反省や今後の指導のことについて考える時間が多いと思われる。しかし質問紙調査だけでは詳細なことを検討できないため、面接調査を実施して、省察について聞き取る必要があるだろう。

3. 幼稚園教諭と保育士のストレスと心理的ストレス反応、専門性の関連

幼稚園教諭と保育士の保育者の専門性が保育者ストレスの緩和を予測し、保育者ストレスが心理的ストレス反応を予測するというモデルを検討した。幼稚園教諭では、子ども察知が子ども対応・理解のストレスを予測した。子どもの行動、表情、態度などに注意をすることは、子どもに対するストレスを緩和していた。これは、日常の子どもの行動を注意深く観察することが、子どもの行動の理解を深め、ストレスの緩和に繋がるのではないかと推察される。子ども対応・理解のストレスと職場人間関係のストレスが、心理的ストレス反応に影響を与えており、最も身近な子どもや同じ職場の先生との関わりが、不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力を引き起こす要因になっていると思われる。西坂(2002)は、園内の人間関係の問題が精神的健康に影響を及ぼすと述べており、類似した結果と考えられる。保育士では、自己考慮が子ども対応・理解のストレスを予測した。これまでの教育や保育について、自己に関して省察をすることが、子ども対応・理解のストレスに影響を及ぼしていた。これは、自分の保

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

育者としての問題などを省察することが、これまでの子どもの対応について反省を促し、その反省がストレスを感じさせてしまうのではないかとと思われる。自己が行っている教育や保育をネガティブに感じてしまう可能性があるかと推察できる。池田・大川（2012）は自己能力の懸念がバーンアウトに影響を及ぼしていると報告しており、本研究も類似した結果が得られたと考えられる。子ども対応・理解ストレス、職場人間関係のストレス、保護者対応のストレスが心理的ストレス反応に影響を及ぼしていた。日常の子どもやその保護者との関わり、職場での人間関係の複雑さや問題が、不安・抑うつ、不機嫌・怒り、無気力を引き起こす要因になっていると思われる。池田・大川（2012）は職場環境のストレス（過剰な期待・要求、自己能力の懸念）、保育者としての力のなさ、保護者対応の難しさと社会的評価の低さがバーンアウトに影響を及ぼしていると報告している。本研究も類似した結果が得られたと思われる。

これまでは、保育士の保育者効力感が子ども対応・理解ストレスや職場人間関係ストレスを緩和すること（赤田，2010）、幼稚園教諭の子ども理解・対応の難しさや学級経営の難しさを緩和する（西坂，2002）という報告がなされてきたが、本研究は、保育者の専門性である省察が保育者ストレスを、保育者ストレスが心理的ストレス反応を予測することに焦点をあてて、研究をすすめてきた。本研究においては、幼稚園教諭と保育士を別々に検討した結果、子どもに関する省察の種別により、保育者ストレスを緩和するという相違が認められた。池田・大川（2012）は、幼稚園教諭と保育士の職種によって、独自のストレスとストレス関連要因の存在があることを示唆しており、本研究も職種による相違が見出された。

【まとめと今後の課題】

本研究は、幼稚園教諭と保育士が評定する保育者ストレス尺度を作成し、保育者ストレス、心理的ストレス反応、保育者の専門性について、幼稚園教諭と保育士で比較検討した。また幼稚園教諭と保育士の保育者の専門性、保育者ストレス、心理的ストレス反応のモデルを検討した。その結果、子ども対応・理解のストレス、職場人間関係のストレス、保護者対応のストレス、時間の欠如

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

によるストレスが見出された。幼稚園教諭と保育士で比較した結果、子ども対応・理解のストレスと保護者対応のストレスについて、幼稚園教諭より保育士の方が有意に高い得点を示した。保育者の専門性の自己考慮、自己注意、子ども分析、子ども察知について、保育士より幼稚園教諭の方が有意に高い得点を示した。幼稚園教諭と保育士の専門性、ストレス、心理的ストレス反応のモデルを検討した結果、幼稚園教諭では、子ども察知から子ども対応・理解ストレスへの負の標準偏回帰係数が、子ども対応・理解ストレスから不安・抑うつと無気力への正の標準偏回帰係数、職場人間関係ストレスから不安・抑うつと不機嫌・怒りへの正の標準偏回帰係数が有意であった。保育士では、自己考慮から子ども対応・理解ストレスへの正の標準偏回帰係数が、子ども分析から子ども対応・理解ストレスと時間の欠如によるストレスへの負の標準偏回帰係数が有意であった。子ども対応・理解ストレスから不安・抑うつと不機嫌・怒りと無気力、職場人間関係ストレスから不安・抑うつ、保護者対応ストレスから不機嫌・怒りへの正の標準偏回帰係数が有意であった。幼稚園教諭と保育士のストレスと専門性には差異があり、また、幼稚園教諭と保育士の専門性とストレスの関連においても、独自の関連性があり、相違が認められた。

本研究では、公立の幼稚園教諭と保育士を調査対象とした。一つの市を調査対象としたため、幼稚園教諭の人数は保育士の3分の1程度であり、人数がアンバランスであった。今後は調査対象者の人数をもっと増やして研究をすすめていく必要があるだろう。次に、赤田（2010）は公立と民間の保育所に勤務する保育士のストレスは相違があると述べており、公立と民間の幼稚園教諭、保育士のストレスや専門性の相違を検討していく必要があるだろう。最後に、本研究では勤務年数、年齢の変数を考慮にいれなかった。上村・七木田（2006）や齊木・中川（2008）は、新人から4、5年目までは対人不安が増加することや、新任はベテランと比較してストレスが高いと述べており、今後は勤務年数や年齢の変数を考慮に入れて研究をすすめる必要があるだろう。

【引用文献】

赤田太郎（2010）. 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

- 心理学研究, 81, 158-166.
- 赤田太郎・滋野井一博・小正浩徳・友久久雄（2009）. 保育士のストレス要因と保育の労働環境に関する研究－身体的苦痛のストレス, 保育上のストレス, 家族関係のストレス, 精神的健康状態, 満足度を通して－ 龍谷大学教育学会紀要, 8, 35-51.
- 秦野悦子・青木淳美（2006）. 保育士の精神的健康におけるストレス要因と効力感 保育と保健, 12, 43-47.
- 池田幸代・大川一郎（2012）. 保育士・幼稚園教諭のストレスが職務に対する精神状態に及ぼす影響：保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として 発達心理学研究, 23, 23-35.
- 石川洋子・井上清子（2010）. 保育士のストレスに関する研究（1）－職場のストレスとその解消－ 文教大学教育学部紀要, 44, 113-120.
- 加藤由美・安藤美華代（2015）. 保育者のメンタルヘルスに関する国内外の研究の同行と展望－学校教員を対象とした研究を参考に－ 岡山大学大学院教育学研究科研究収録, 159, 1-10.
- Lazarus,R.S.(1984). Puzzles in the study daily hassles. *Journal of Behavioral Medicine*, 7, 375-389.
- 那須野康成（2006）. 保育者のストレスに関する研究（その1） 愛知学泉大学・短期大学紀要, 41, 135-139.
- 西坂小百合（2002）. 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, 50, 283-290.
- 西坂小百合・岩立京子（2004）. 幼稚園教師のストレスと精神的健康に及ぼすハーディネス, ソーシャルサポート, コーピング・スタイルの影響 東京学芸大学紀要第1部門教育科学, 55, 141-149.
- 齊木久代・中川香子（2008）. 保育職問題評価尺度作成の試み－保育職満足度, ストレス関連反応との関係－ 保育士養成研究, 26, 全国保育士養成協議会, 77-86.
- 坂田和子（2000）. 保育者の精神的健康に関する研究－保育所職員の日常的ストレスについて－ 紀要（紀要編集委員会編 聖心ウルスラ学園短期大学）,

30, 65-71.

嶋崎博嗣・森昭三（1995）. 保育者の精神健康に影響を及ぼす心理社会的要因に関する実証的研究 保育学研究, 33, 175-184.

杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃（2009）. 保育における省察の構造 幼年教育研究年報, 31, 5-14.

鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二（1997）. 新しい心理的ストレス反応尺度（SRS-18）の開発と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 4, 22-29.

富田久枝（2009）. 保育現場におけるカウンセリングニーズの実態と課題 財団法人こども未来財団

豊田秀樹（1998）. 共分散構造分析（入門編）：構造方程式モデリング 朝倉書店.

Turner, R. J., & Wheaton, B. (1995). Checklist measurement of stressful life events. In S. Cohen, R. C. Kessler & L. U. Gordon (Eds.), *Measuring stress*. New York: Oxford University Press. Pp.29-58.

上村眞生・七木田敦（2006）. 保育士が抱える保育上のストレスに関する研究－経験年数及びソーシャルサポートとの関連からの検討－ 広島大学大学院教育学研究科紀要, 55, 391-395.

付記

本論文は第2著者が皇學館大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。本研究に協力してくださいました鈴鹿市の教育委員会、幼稚園教諭、保育士のみなさまに深く感謝申し上げます。

保育者のストレスと専門性との関連（渡邊・青山）

The relationship between stress and specialty of kindergarten and nursery teachers; In comparison with kindergarten teachers and nursery teachers

Kenji WATANABE (Education Department, Kogakkan University)

Nao AOYAMA (Mie Prefectural Medical Center for Child Growth Development and Disability)

Abstract

The purpose of this study was to compare kindergarten teachers and nursery teachers in terms of stress, psychological stress response and specialty of them, and to examine the effect of stress, psychological stress response and specialty of them. Nursery teachers showed higher points than kindergarten teachers in stress relating to child care and stress from staff-parent relations. Kindergarten teachers showed higher points than nursery teachers in self-consideration, self-attention, analysis of children and sense of children. In kindergarten teachers, stress relating to child care was affected by sense of children, and psychological stress response was affected by stress relating to child care and stress from human relations at work. In nursery teacher, stress relating to child care was affected by self-consideration, and stress relating to child care and stress from lack of time were affected by analysis of children. Psychological stress response was affected by stress relating to child care, stress from human relations at work and stress from staff-parent relations.

Keywords : stress of kindergarten and nursery teachers, specialty of kindergarten and nursery teachers, psychological stress response, kindergarten teachers, nursery teachers